新富町文化財調査報告書　第 51 集

祇園原古墳群 11

（ぎおんばるこふんぐん）

国指定史跡「新田原（にゅうたばる）古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書(11)

59号墳　前方部隅角の調査

２００８

宮崎県　新富町教育委員会

序

宮崎県の一ツ瀬川流域は数多くの古墳群があることで知られています。このうち本町にある国指定史跡新田原古墳群は、古墳時代後期を中心とした日向地方最大の首長墓群を中心としています。

新富町ではこの重要な史跡を広く活用するため、平成９年に策定した基本計画をもとに調査を行っています。

本年度は昨年策定した百足塚古墳の復元整備実施設計図をもとに、関係機関との調整をはかり、次年度から本格的な整備を進めることになりました。

また整備の中心の一つとなる59号墳の調査も本年度最終年度となり、より具体的な古墳の形状などを知ることができました。

今後もこれら調査データを元に、整備計画を進める所存です。最後になりましたが、調査と計画立案の際にお世話になった関係者の方々には深く御礼申し上げます。

新富町教育長　　米　良　郁　子

例　言

１．本書は平成19年度に行った宮崎県児湯郡新富町に所在する国指定史跡新田原古墳群の史跡整備に向けた確認調査の概要報告書である。
２．発掘調査は新田原古墳群登録記念物保存修理一般事業として文化庁の国庫補助金と宮崎県費補助金を受け、宮崎県文化財課及び新田原古墳群史跡整備専門検討委員会の指導のもと行った。
３．国指定史跡新田原古墳群は新富町内の大字新田に分布する古墳の指定名称であるが、古墳の分布は大きく４つに大別できるため、それぞれ塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。今回の短期整備計画は祇園原古墳群を対象としている。史跡整備の短期整備計画は祇園原古墳群を対象としている。
４．本書の執筆・編集は有馬が行った。
５．本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図はそれぞれ現場にて平板測量した。
６．本書で使用する方位は古墳群分布図以外はすべて磁北である。
７．出土遺物とその他の記録類はすべて新富町教育委員会生涯学習課で保管している。

本文目次

Ⅰ．古墳群の位置と調査の経緯……１ページ
Ⅱ．既往の調査……５ページ
Ⅲ．平成19年度の事業……９ページ
Ⅳ．まとめ……18ページ

図版目次

図１　一ツ瀬川流域の古墳と古墳群……２ページ
図２　祇園原古墳群の古墳分布……３ページ
図３　百足塚古墳の復元模式図……６ページ
図４　新田原59号墳の調査区……10ページ
図５　59号墳の各調査区と円筒埴輪……15ページ

写真図版目次

写真１　祇園原古墳群の古墳分布……４ページ
写真２　調査中の百足塚古墳……７ページ
写真３　祇園原古墳群の前方後円墳群……８ページ
写真４　はにわづくり……９ページ
写真５　上新田っ子を育てる会……10ページ
写真６　10トレンチ……11ページ
写真７　テラス上の円筒埴輪……11ページ
写真８　周溝に出土した形象埴輪……11ページ
写真９　円筒埴輪列……11ページ
写真10　11トレンチ作業状況……12ページ
写真11　11トレンチ……12ページ
写真12　12トレンチ……12ページ
写真13　12トレンチ（上から）……12ページ
写真14　14・15トレンチ……12ページ
写真15　14トレンチ……12ページ
写真16　15トレンチ……12ページ
写真17　14・15トレンチ遠景……12ページ
写真18　13トレンチ前方部隅角……13ページ
写真19　13トレンチ全景……13ページ
写真20　13トレンチ南側……13ページ
写真21　13レンチ東側……13ページ
写真22　花粉分析の試料採取作業……14ページ
写真23　59号墳出土埴輪……16ページ

Ⅰ．古墳群の位置と概要

１．国指定史跡「新田原古墳群」と祇園原古墳群の概要

⑴　国指定史跡「新田原古墳群」の実態

国指定史跡新田原古墳群は一ツ瀬川左岸台地から沖積地に点在する古墳の総称である。

その実態は、現在の新富町西部（旧新田村）にあった古墳を行政単位で指定措置した結果の名称であり、その分布の状況や推測される古墳の築造時期から、本来は大きく４つの古墳群に大別すべきものである。現在はそれぞれを別の古墳と考え、東から塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。

⑵　祇園原古墳群の概要

このうち、祇園原古墳群は一ツ瀬川左岸台地上にあり、154基の高塚墳が現存している。内訳は、前方後円墳14基、方墳１基、円墳138基、墳形不明１基だが、これまでの発掘調査で墳丘が消滅した円墳の周溝が40基確認されているので、古墳総数は194基に及ぶ。

古墳の分布は標高70～90mの台地上で、西側直下には一ツ瀬川が流れ、東は一段高い台地面になっている。また台地には南北に貫入する２本の谷があり、古墳群はこれら谷地形によって区分されたＡ～Ｄの４グループに大別できる。

墓域の形成は弥生時代終末期までさかのぼる。群の北東部高位台地で確認された川床遺跡には円形周溝墓・方形周溝墓を中心とした195基の土壙墓群が発見された。最近の調査によって、これら墓域の周辺の低位台地面には、竪穴住居を中心とした小規模な集落が確認されている。

古墳時代前期になると北西部に前方後円墳が２基登場する。詳細はわからないが、Ａグループの北西部に展開するグループは前期から中期にかけての築造である可能性が高い。

Ａグループは東側傾斜面を南北につらなって築造された12基の前方後円墳が中心である。前期には、台地北西端部に前方部が低平で後円部径に対して狭長な前方後円墳が２基（187号墳・195号墳）築造されている。その後、同形の前方後円墳は継続しないが、５世紀中頃になって大久保塚古墳が造られる。表採される埴輪や墳形は、先述のように西都原古墳群の女狭穂塚古墳や茶臼原古墳群の児屋根塚古墳に類似するため、近接する時期に築造されたものと推測できる。５世紀後半には大久保塚古墳に継続する古墳はみあたらないが、今後の調査で中小規模墳の築造時期がわかれば、古墳群築造の連続性を明らかにできる可能性もある。

６世紀になると前方後円墳の築造は爆発的に増加し、墳長60～100mの大型墳と墳長60m以下の中規模墳が築造され、その多くで埴輪が樹立されている。ほとんど調査されていないので、詳細は今後の検討課題であるが、埴輪の観察から、前者は59号墳→百足塚古墳→68号墳→弥吾郎塚古墳と連続し、後者は水神塚古墳→機織塚古墳→52号墳と連続して築造されたと予想される。これら大規模墳と中規模墳は併行して築造された可能性が高く、古墳群全体としては中小の円墳を含めた階層構成型の群構造であると考えられる[7]。

Ｂ・Ｃグループは前方後円墳をそれぞれ１基づつ含む後期群集墳である。特にＢグループではほ場整備にともなう調査で36基の消滅墳が検出され、周溝に掘られた二次的埋葬施設と考えられる地下式横穴が５基検出され、近接して４基の馬の埋葬土壙もあった。これら群集墳の築造は、出土した須恵器を検討すると、TK10型式併行期に始まり、MT85型式をピークに、隼上りⅡ型式まで継続するようだ[8]。

Ｂグループの霧島塚古墳は詳細不明だが、Ｃグループは前方後円墳の139号墳ののち、140号墳（円墳）・138号墳（方墳）と続く終末期の一首長墓系譜であり、石船古墳群のように６世紀後半に登場したものだろう。祇園原古墳群はこれらの首長墓群を中心に、小円墳が数多く築造され、その結果、大きな古墳群となったのだろう。また群集墳の築造が終息し、２次的埋葬が行われるなか、Ａ群の北部高位台地斜面に横穴墓群が築造されている。

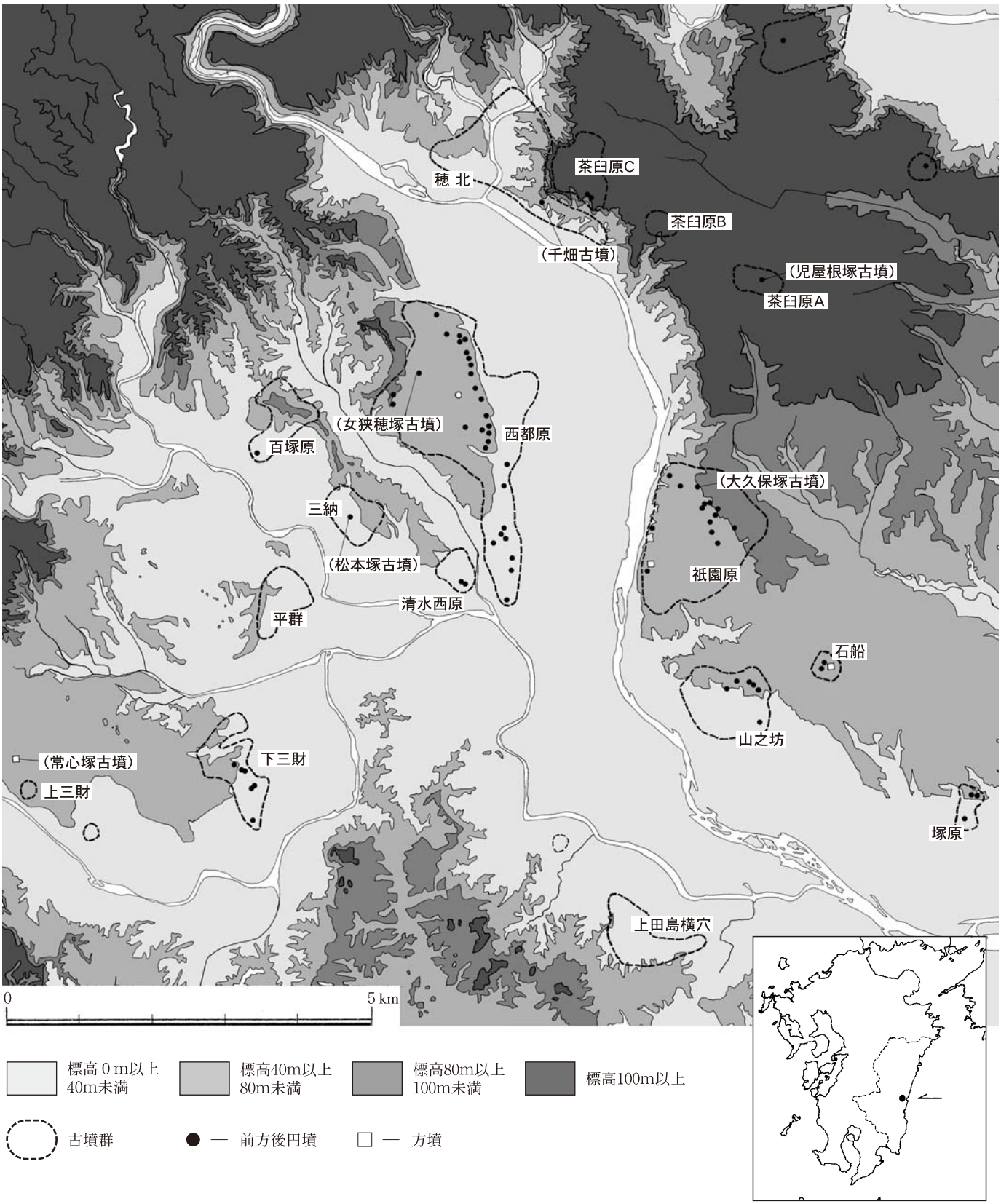

図１　一ツ瀬川流域の古墳群分布

図２　祇園原古墳群の古墳分布

２．整備までの経緯

新田原古墳群は昭和19年に指定措置を受けてから昭和40～50年代にかけて公有化がなされてきた。それら指定地は町が管理している。しかし公有化された墳丘は保護の対象でありながらも、その周辺に存在する埋没した周溝や、古墳を取り巻く築造当時の地形など重要な考古学的情報は十分把握されていない。

このような状況のもと、指定措置から半世紀以上が経過し、建造物が古墳どうしの視界を遮り、農地のほ場整備によって旧地形が変化するなど、古墳を取り巻く周辺環境が大きく変化してきた。また平成４年度に祇園原古墳群が分布する祇園原地区でほ場整備が計画されたのをきっかけとして、平成７年度から追加指定措置と指定地買収を行い、平成８年度には積極的な史跡の活用を目的に「新田原古墳群史跡整備基本計画」を策定した。

基本計画の骨子は「古墳の保存整備と同時に畑地のなかに点在する古墳の風景をさらに良好なものとし、歴史と自然が融合した景観整備を行う」ことであり、対象面積が広大であるため、短期・中期・長期からなる30年以上の計画とした。

３．短期整備計画

短期整備の範囲は、「新田原古墳群」のなかでも公有化率が高く、前方後円墳が多く分布する祇園原古墳群Ａグループを対象とした。Ａグループは墳丘や周溝を含めた古墳間が連続して町有地であるため、見学者の利便性にあった整備がしやすい。短期整備では、①主要な前方後円墳の

写真１　祇園原古墳群の古墳分布

復元、②ガイダンス施設の設置、③見学園路の整備を目的とした。

整備期間は平成９年度から20年度までの13年間で、10年間にわたる発掘調査で百足塚古墳と59号墳の基礎データを整理し、墳丘復元やガイダンスでの展示を予定していた。

平成17年度には基本計画をより具体的に整理し、短期整備計画区域の整備方針として、Ａ群を３つの段階に区分し、百足塚古墳・59号墳・68号墳の３基を含む第１期整備優先区域を５ヶ年間で整備する実施計画を立案した。

平成18年度には、百足塚古墳の復元のための実施設計を行った。設計に際しては、各調査区のデータをもとに、遺存している墳丘面と築造当初の墳丘の予測を行い、遺構を保存すべき被覆土と掘削すべき埋土量の計算を行っている。

Ⅱ．既往の調査

１．整備事業までの調査

はじめて祇園原古墳群の記録が登場するのは、明治32年のことである。宮崎県を訪れた坪井正五郎は古墳群を巡見して、円筒埴輪列が残る古墳が存在することや、横穴式石室を採用した前方後円墳があることなどを略述している。この巡見の際に表採された形象埴輪は八木奘八郎によって紹介されたこともあった。

その後、大正４年には京都大学助手梅原末治（のちの同大学教授）が西都原古墳群の調査に関連して児湯郡一帯の古墳群を巡見し、その結果を「日向西都原周辺の古墳」で紹介している。主要古墳の名称が紹介されたのはこの時は初めてである。

昭和19年に国指定史跡となってからは調査の手が入ることがなく、本格的な調査が始まったのは最近になってからである。平成元年には新田原古墳群管理策定事業の一環として、古墳群の航空測量が行われ、その概要は平成５年に報告されている。

平成３年度には、祇園原古墳群でほ場整備を目的とした発掘調査が開始され、昭和のはじめ頃に消滅した円墳36基の周溝が確認できるにいたった。周溝には２次的な埋葬主体部と考えられる地下式横穴が５基発見されている。また周溝に隣接する状態で発見された馬の埋葬土壙が５基発見されている。

平成５年度からは祇園原古墳群で宮崎大学考古学研究室との合同による墳丘測量調査がおこなわれ、祇園原古墳群の前方後円墳のほとんどが測量図作成されるにいたった。

２．整備事業における確認調査

史跡整備事業における確認調査は、これまで百足塚古墳（新田原58号墳）と新田原59号墳の調査をおこなってきた。

⑴　百足塚古墳の調査

百足塚古墳は墳長76.4m、後円部径32m、前方部幅43.6m、クビレ部幅38mを測り、前方部をほぼ正南にむけ、周囲に盾形周溝を有する２段築成の前方後円墳であることが判明した。墳丘は東から西への傾斜面に立地し、盾形周溝は東側では確認できるが、西側では等高線の実測でようやく痕跡を認め得るような状態であった。また北西部の周溝に近接して円墳（62号墳・63号墳）が２基あり、百足塚古墳に従属的な陪塚の可能性が高い。

百足塚古墳では平成５～６年度には指定地の追加を行う確認調査として、62号墳・63号墳を含んだ範囲にトレンチを４本設定した。その結果、それぞれの古墳で周溝が確認でき、62号墳と百足塚古墳には大量の埴輪が樹立されていたことがわかった。検出できたのはほとんどが円筒埴輪で、川西編年のⅤ期に該当するため、両古墳は６世紀に築造されたことが判明した。

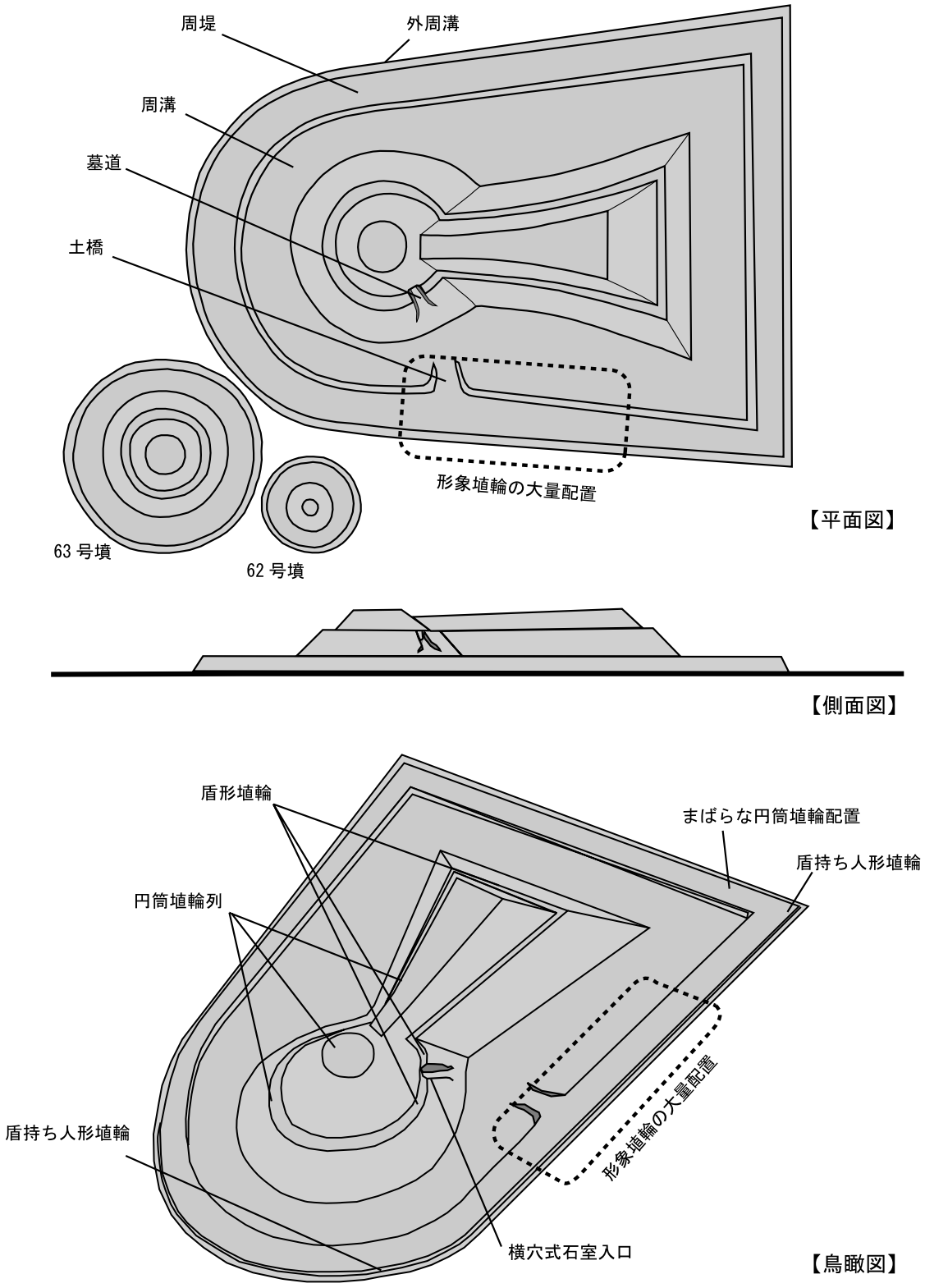

図３　百足塚古墳の復元模式図

平成９年度からは、史跡整備を目的とした調査を開始し、百足塚古墳に近接する62・63号墳の周溝の位置を把握する調査区（Ⅰ区)、百足塚古墳後円部西側周溝を確認する調査区（２区）を調査し、それぞれ周溝と転落した埴輪片、弥生時代中期の住居址３基を検出した。また前方部西側に設定したトレンチからは多くの形象埴輪片が出土した。

平成10年度から12年度には形象埴輪の配置や内容を確認するため、前方部西側周溝から後円部西側周溝に調査区（２区・３区）を設定した。調査の結果、周溝と同様に完周する「周堤」の存在とそこに樹立されていたであろう大量の形象埴輪が確認できた。周堤の外側には現在では部分的にしか確認できない外周溝（幅約50㎝）があり、このことから周堤の幅は約６ｍであることがわかった。また周堤から西側クビレ部にむかう幅２ｍの土橋の存在も確認できた。形象埴輪の出土箇所はこの土橋から南側の周溝と外周溝内にいたる約40ｍにも及び、形象埴輪による祭祀行為はこの土橋から周堤上にあったと予想される。形象埴輪片の出土点数はプラスチックコンテナケースで約400箱にも及び、その数と種類は西日本でも類例の少ないものである。

平成13年度からは墳丘と東側周溝の確認調査を開始した。周溝は各所で立ち上がりが確認でき、おおよそ盾形周溝が確認できることが判明した。また後円部に設定したⅣ区で埋葬主体と考えられる横穴式石室の閉塞部が確認できた。調査は閉塞部の取扱いを残し、すべてのトレンチは調査終了している。

⑵　新田原59号墳

平成17年度からは新田原59号墳の確認調査を開始し、墳丘主軸と後円部・クビレ部のトレンチを設定し、墳丘の遺存状況の確認を行った。１トレンチでは、家と鶏の形象埴輪片が外堤から転落した状態で検出でき、４トレンチでは外堤の外側から須恵器が集中して破砕した状態で見つかった。墳丘は２段築成であり、１トレンチでは墳頂とテラスで円筒埴輪列が遺存していることが判明した。５トレンチの前方部ではテラスに円筒埴輪が６本並んでいる状態が良好に検出できた。

平成18年度の調査では後円部西側に設定した８トレンチ、クビレ部附近に設定した９トレンチ、前方部の東西に設定した６、７トレンチを調査し、６トレンチではテラスに円筒埴輪列の遺物を検出できた。

写真２　調査中の百足塚古墳

写真３　祇園原古墳群の前方後円墳群

Ⅲ．平成19年度の調査

１．事業の概要

⑴　確認調査の概要

新田原59号墳の確認調査の最終年度として、８箇所にトレンチを設定し、墳丘各所の形状を確認した。特に後円部東側に設定した10トレンチからは、馬・人物などの形象埴輪が出土し、平成17年度に調査した１トレンチ同様に外堤にあった形象埴輪が周溝の中に転落したものと予想される。

また前方部隅角については墳端部の形状が不明瞭であったため、幅10mの正方形状に調査区を設定し、遺構の遺存状態を確認した。調査の内容については次節で述べる。

表２　平成19年度の事業概要

事業内容／月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
整備協議												
59号墳発掘調査												
59号墳出土遺物整理												

⑵　百足塚古墳及び新田原59号墳の出土遺物の整理作業

百足塚古墳の出土埴輪の整理作業は、その破片点数が多く、ようやく個体識別が最終段階に至るところである。本年度は特に後円部の１/４に及ぶ調査区（４区）の整理に入った。

ほとんどは円筒埴輪であるが、樹立位置から転落した個体ばかりで、現地からの取上げ作業の多くが一括であったため、個体毎の破片集めに時間がかかっている。テラスと墳端の一部からは、墳丘で採取される形象埴輪としては唯一の盾形埴輪が３個体分認められている。

59号墳の出土埴輪はその点数が少ないため、昨年度までに出土した埴輪片の個体識別は比較的容易に終わっている。今年度は完形に近い円筒埴輪１体の実測図を作製するに終始し、今年度出土した資料は洗浄までの作業を終了させている。

写真４　はにわづくり

⑶　地域と共同した復元整備

平成18年度から実施している「上新田っ子を育てる会」との共催事業として、子供達との埴輪づくりを進めている。

同事業では実物の８割の大きさを基本とした円筒埴輪を製作し、復元した百足塚古墳のテラスや外堤に並べ、歴史ある古墳群をより身近かなものに感じようという試みをすすめている。昨年度実施した手作り埴輪の焼成は、県立西都原考古博物館に協力して頂いたが、今年度の焼成作業は地元新富町の陶芸教室に協力を仰ぎ、灯油窯で焼成作業を行った。この試みは次年度以降も推進していく予定である。

写真５　上新田っ子を育てる会

図４　新田原59号墳の調査区

２．事業体制

本事業は新富町教育委員会が主体であり、県文化課及び新田原古墳群史跡整備専門整備検討委員会の指導のもと行った。平成19年度の事業体制は下記のとおりである。

【平成19年度の発掘調査体制】

○ 総　　括　下村　喜秋（新富町教育委員会教育長）平成19年６月まで
　　米良　郁子（新富町教育委員会教育長）平成19年７月から
　　馬渡　和規（同　生涯学習課長）
　　福原　広一（同　生涯学習課長補佐兼社会体育係長）
○ 庶　　務　有馬　義人（同　生涯学習課主査　庶務担当）
○ 調　　整　有馬　義人（同　生涯学習課主査　文化財担当）
○ 調　　査　樋渡将太郎（同　生涯学習課主任主事　埋蔵文化財担当）
○ 指　　導　小田富士雄（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：福岡大学教授）
　　柳沢　一男（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：宮崎大学教授）
　　森本　幸裕（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：京都大学教授）
　　吉本　正典（宮崎県教育庁文化財課埋蔵文化財係主任）
○ 作　業　員　杉尾美千子、坂本貞夫、清美喜子、溝口敦子、甲斐直美、吉永和美
　　清　久夫、能見カツ子、野尻富子

３．確認調査

⑴　調査の方針

今年度の調査を含め、事業の性格上、史跡整備のための確認調査であるため、以下のような点に留意して調査を行っている。

墳丘は幅１mのトレンチ調査を基本とする。各調査区は墳丘を確認することが最大の目的であるため、墳端、テラス、墳頂平坦面の状態把握を優先して実施した。

写真６　10トレンチ

写真７　テラス上の円筒埴輪

写真８　周溝に出土した形象埴輪

写真９　円筒埴輪列

円筒埴輪は遺存状態が良好な部分は現地保存を基本とするが、樹立位置で倒れていたり、樹立位置から移動している個体について取り上げて整理復元する。

盛土の状態は墳丘構築の方法を知る重要な知見であるが、整備目的の調査であるため盛土であると認定できた段階で掘り下げを終了する。ただし盛土か埋土か不明瞭で判断ができない箇所は

写真10　11トレンチ作業状況

写真11　11トレンチ

写真12　12トレンチ

写真13　12トレンチ（上から）

写真14　14・15トレンチ

写真15　14トレンチ

写真16　15トレンチ

写真17　14・15トレンチ遠景

攪乱穴などを利用してサブトレンチを設定し確認を行う。
　埋葬施設はその位置を確認するのみとし、開口部が判明した際でも、内部を調査しないこととしている。

⑵　59号墳の確認調査
①59号墳の概要
　祇園原古墳群を見渡す標高80～90mの高位台地面に築造された前方後円墳である。いずれも現状で、墳長71m、後円部径32m、前方部幅42m、クビレ部幅24m、後前高差１mを測る。墳丘は後円部を北西方向に向け、東側には明瞭な周溝を認めることができるが、西側や南側はなだらかな斜面になっていて墳端部が不明瞭である。また北側は昭和40年代に土砂採取を目的とした大きな造成の手が入っているため、旧地形やかつて存在したであろう周溝の形状がわからなくなっている。また墳丘東側には円墳が２基、北側の周溝に近接したであろう箇所に１基の円墳が認められる。
　墳丘からは多くの埴輪片が採取でき、昨年度までの調査で後円部墳頂とテラスには円筒埴輪列が存在が判明した。各段の円筒埴輪列は、一様に近接して樹立されていたようであるが、一部に空白の箇所もあり、埴輪以外の立物があった可能性もある。また後円部の西側周溝からは、外堤から転落した状態で鶏形埴輪の頭部などの形象埴輪が検出され、西側外堤からは須恵器片が集中して検出された。このことから、形象埴輪や須恵器による祭祀空間が東側の外堤を中心に存在たと予想される。
　墳丘のテラスの位置は各調査区で89mから90mで一定の高さを保っているようであるが、墳端の高さは南北で相当に開きがある。このことから昨年度までの調査結果からは、テラスで高さを水平に保つことはあっても、墳端は地形にあわせて築造したと考えた。

写真18　13トレンチ前方部隅角

写真19　13トレンチ全景

写真20　13トレンチ南側

写真21　13トレンチ東側

②確認調査の内容
10トレンチ
　後円部東側に設定した調査区で、テラスから外堤までの延長18mを対象とした。調査前から墳端に幅１m以上の陥没穴があったので、埋葬施設などの可能性も予想していたが、まったく古墳とは関係のない攪乱であることがわかった。調査の結果、図５のように墳丘端部に高さ50㎝のテラスが巡ることがわかった。テラスの上には円筒埴輪が２本検出でき、検出面で幅２mのテラスの存在が

判明した。周溝の中には墳丘側から円筒埴輪片が、外堤側からは広い範囲に馬、人物などの形象埴輪片が検出できた。それらはすべて外堤にあったものであるが、外堤の上はすべて攪乱を受けていて、樹立してあった当時の状況は残していない。

写真22　花粉分析の試料採取作業

11トレンチ

後円部の東側クビレ部方向に向けて設定した延長９ｍの調査区である。テラス状は何らかの人為的な作業によって円筒埴輪列はまったく見つからず、テラスも端部を中心に不明瞭な状態になっていた。墳丘端部にはテラスが巡るが、10トレンチよりも低く、傾斜変換が緩やかで不明瞭である。周溝の中からは転落した円筒埴輪が検出された。

12トレンチ

東側くびれ部から前方部側に設定した調査区で、幅２ｍ、長さ６ｍを測る。調査区の上には現状に見て取れる大きな攪乱穴があり、調査の結果、そこで発生した大量の土が墳丘端部にむけて堆積していることがわかった。

攪乱土の中には大量の埴輪片が含まれ、墳頂ないしテラスにあった円筒埴輪列が相当攪乱されているものと予想される。墳端はやや不明瞭は傾斜変換で、なだらかな傾斜をもっていてつかみづらい。

13トレンチ

東側前方部隅角に広く設定した調査区で、前方部に対し直交方向と平行方向に幅１ｍのトレンチを延長して、周溝の存在を確かめた。その存在は東側では確認できたが、南側では認められなかった。このことから、前方部の南側におけて周溝はもともと存在しなかった可能性を考える必要がある。外堤ないし周溝は東南側の隅角あたりで程なくして切れるような形状に復元できるのだろうか。墳丘端部にはテラスがあって、墳丘第１段の端部を調整していたようだ。前方部隅角はなだらかに幅広いテラスになると予想している。遺物は若干の埴輪が出土しているが、調査区の範囲に対して少ないため、テラスの円筒埴輪列などは良好に遺存していると予想される。

14トレンチ

後円部西側に設定した調査区で、テラスの直下から墳端にむけて延長〇ｍを確認した。テラス及び墳端は非常に不明瞭で、ただなだらかに傾斜していくような状態である。若干の円筒埴輪片が出土している。

15トレンチ

東側クビレ部の前方部よりに設定した調査区で、墳端の確認を目的としたが、端部はやはり不明瞭に傾斜していて捉えがたい。円筒埴輪片が出土している。

16トレンチ・17トレンチ

前方部西側隅角を確認するために設定した調査区で前方部に直交する調査区を16トレンチ、平行する調査区を17トレンチとした。いずれにおいても墳端は掘削されていて、本来の形状を留めていない。円筒埴輪片が出土しているが、遺物量は少ない。

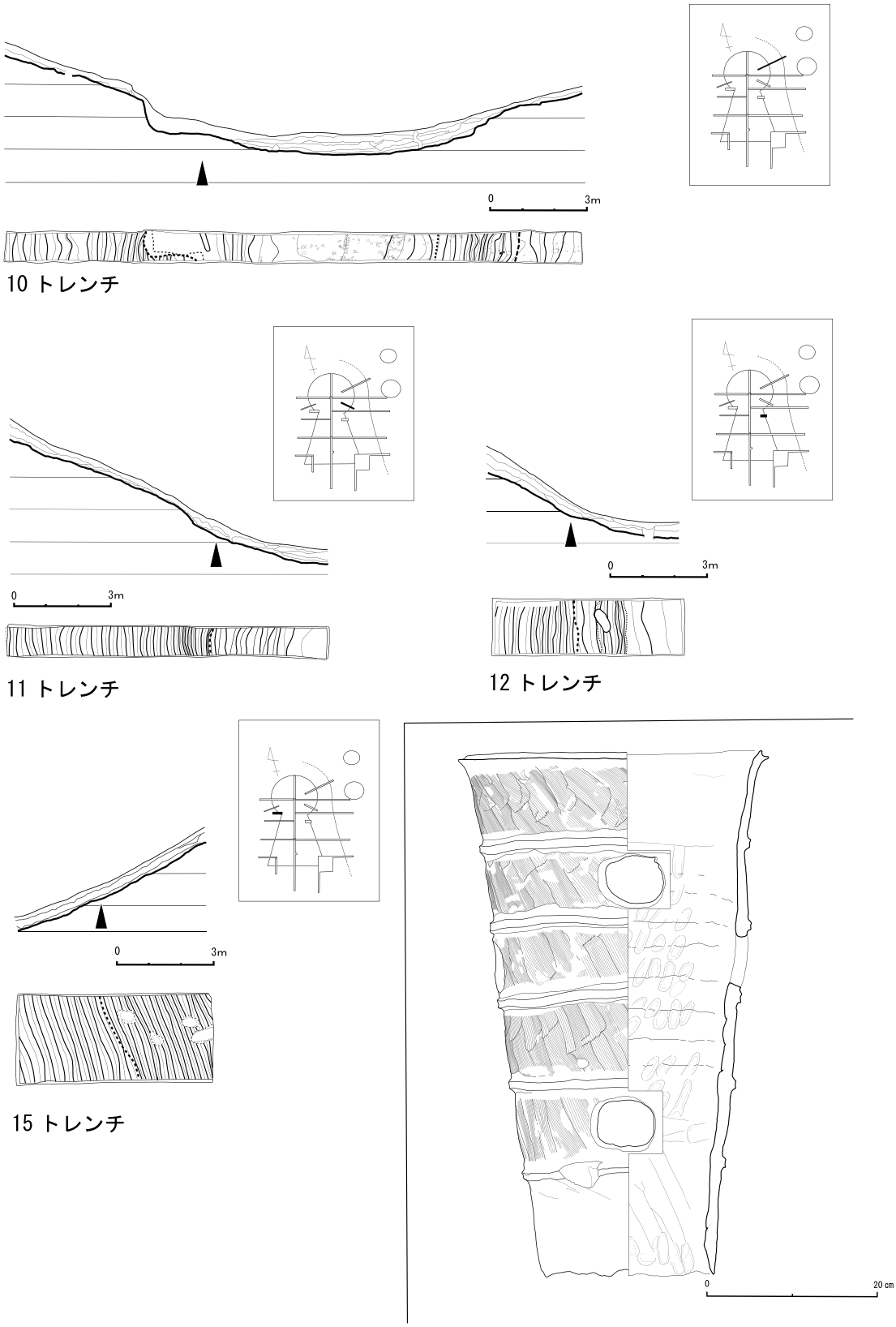

図５　59号墳の各調査区と円筒埴輪

1・2・4……馬形埴輪か
3……鶏形埴輪
5……円筒埴輪
6・7……人物埴輪

写真23　59号墳出土埴輪

③出土遺物

各調査とも円筒埴輪片が出土しており、現在洗浄作業中である。なかでも形象埴輪は10トレンチしか出土していないが、人物の手、動物に加え、馬形埴輪の胴部などの可能性の高い形象埴輪も出土している。10・13トレンチから須恵器片が出土している。

４．百足塚古墳及び新田原59号墳の出土遺物の整理

⑴　百足塚古墳（新田原58号墳）

百足塚古墳の出土遺物整理は、後円部の調査区（４区）出土した円筒埴輪を中心に行った。その大部分は築造時の樹立位置から移動しており、現位置で検出した個体は少ないため、個体毎の破片同定が困難究めた。なお４区以外の円筒埴輪についてはその個体同定が終了しているので、今後は実測図作成を進める予定である。

⑵　新田原59号墳

59号墳出土遺物の整理は、平成18年度出土の円筒埴輪の整理及び本年度出土した遺物の洗浄及び一部形象埴輪の整理を行った。

円筒埴輪は５条６段のものが多いが、昨年度出土した個体には２段３条のものがあり、バラエティ豊かである。実測図を作製した図５の円筒埴輪は、５条６段構成で、第２段・第３段、第４段に透穴を施し、外面には基底部を除き１次調整タテハケのみで、比較的粗い原体を使用している。内面は粘土つなぎ目を明瞭に残す粗いタテナデを施し、口縁部附近はヨコナデを加える。

今後は整理した遺物の復元作業を進める予定である。

Ⅳ．まとめ

本年度は新田原59号墳の３ヶ年計画の発掘調査の最終年度になる。今年度の調査で、各トレンチで状況が異なる墳丘端部のテラスの存在は、もともと傾斜面に古墳を築造しようとしたための工夫だったようだ。墳丘のテラスと墳頂には円筒埴輪列が隈無く樹立されていたようだ。一部には埴輪１本分の空白も存在するため、土製の埴輪以外の立物も想定しておきたい。形象埴輪の出土は後円部北東側の外堤周辺からしか出土していないため、この外堤に樹立された形象埴輪群があったのだろう。東側の外堤の一部には須恵器が大量に検出された箇所があり、須恵器による祭祀行為も存在したようだ。なお今回の確認調査では埋葬主体は確認できなかった。

また史跡整備事業としては、国指定地の拡大作業を行った。次年度は新田原58号墳の墳丘復元を開始する予定であり、事業進行と同時に報告書作成にむけて作業を進めて行く予定である。

【参考文献】

⑴　宮崎県　　『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』1997
⑵　柳沢　一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第14号　1995
⑶　岸本　直文「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻２号　1992
⑷　高橋　克壽「西都原171号墳の埴輪」『宮崎県史』第７号　1994
⑸　樋渡将太郎「町内遺跡19」『新富町文化財調査報告書』第35集 新富町教育委員会　2003
⑹　有馬　義人「新田原古墳群」『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』宮崎県　1997
⑺　藤本　貴仁「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』第16号　1998
⑻　文化財保存計画協会編『新田原古墳群史跡整備基本計画書』新富町教育委員会　1996
⑼　梅原　末治「日向西都原付近の古墳」『歴史地理』第25巻２号　歴史地理学会　大正４年

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	ぎおんばるこふんぐん 11
書　　名	祇園原古墳群11
副　書　名	平成19年度　発掘調査概要報告書
巻　　次	11
シ リ ー ズ 名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第 51 集
編　集　者　名	有馬　義人
編　集　機　関	新富町教育委員会
所　在　地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発 行 年 月 日	２００８年　３月

ふりがな 所収遺跡名・地区名	所　在　地	コ　ー　ド		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
新田原(にゅうたばる)59号墳	大字新田字東俣(おおあざにゅうたあざひがしまた)	47	1001	0700420 ～ 080331	約200㎡	史跡整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新田原(にゅうたばる)59号墳	古　墳	古墳時代	前方後円墳	埴輪・須恵器	円筒埴輪列

新富町文化財調査報告書　第51集

祇 園 原 古 墳 群 11

発行年月日　２００８年３月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　㈱印刷センタークロダ